2022年9月3日
宮城県誕生150周年記念講演会
宮城県行政庁舎講堂

歴史のなかの宮城県

平　川　新
東北大学名誉教授
宮城県慶長使節船ミュージアム　サン・ファン館館長

仙台藩の解体と宮城県の成立

仙台藩62万石

明治元年
戊辰戦争敗北後
28万石へ

明治5年
仙台県から
宮城県へ

明治9年
現：宮城県の成立

図：河北新報

図「まっぷるトラベルガイドSite」

近現代の宮城の歴史

- 明治5年（1872）の宮城県成立から<u>150年</u>
- 戊辰戦争　明治元年（1868）からは<u>154年</u>

→　154年

77年　77年

1868年 戊辰戦争　1945年 敗戦　2022年　県制150年

戦前の77年 戊辰戦争からの戦後復興 東北独自の重荷を背負った	戦後の77年 日本全体の戦後復興

いずれも戦争被害は甚大
だが、いずれも戦後復興の意欲をかき立て、
豊かな社会を実現したいと頑張ってきた

県制150年の歴史とは
二つの戦後復興に取り組み、豊かさを求めてきた歴史である

河北新報2022年2月15日インタビュー
宮城県誕生150年

宮城県 あす誕生150年

歴史解釈見直す節目に

平川新・東北大名誉教授に聞く

宮城県は16日、誕生から150年を迎える。東北大の平川新名誉教授（日本近世史）は河北新報社のインタビューに対し、宮城、東北を巡る後ろ向きな歴史評価に異を唱えた。戊辰戦争での敗戦、食糧や人材の供給基地の側面に焦点を当てた「対中央従属論」を「外から押し付けた、上から目線のワンパターンな解釈」と指摘し、「今回の節目を機に、未来が見える歴史解釈を共有してほしい」と訴えた。

（聞き手は報道部・土屋聡史）

◇

―150年で培われた県民の精神風土をどう見るか。

「代表的な産業の稲作から考えたい。自然災害や凶作に見舞われながらも、奥羽の民は商品価値が高い米作りに果敢に取り組んできた。稲作は本来、亜熱帯の産業。『リスクは大きいが、やってやる』という心持ちがあったからこそ、なし得た。まさに農民のチャレンジ精神が見て取れる。不適な環境にあらがって工夫を重ねる頑張りは、食糧供給地としての自負と誇りがあったからだ」

―「食糧供給地」が、時に後ろ向きな文脈で説明される。

「コメは商品価値が高い。広大な土地が広がる地の利を踏まえた自然な判断だ。にもかかわらず、『中央からの収奪』『従属』と語られた。労働力やは全国的った話で被害と重メージを

ひらかわ・あらた　東北大大学院博士課程修了。東北大東北アジア研究センター長、東北大災害科学国際研究所長などを歴任。専門は近世史。宮城県出身。

宮城県は16日、誕生から150年を迎える。東北大の平川新名誉教授（日本近世史）は河北新報社のインタビューに対し、宮城、東北を巡る後ろ向きな歴史評価に異を唱えた。

戊辰戦争での敗戦、食糧や人材の供給基地の側面に焦点を当てた「対中央従属論」を「外から押し付けた、上から目線のワンパターンな解釈」と指摘し、「今回の節目を機に、未来が見える歴史解釈を共有してほしい」と訴えた。

解釈を転換させる具体的な例をいくつか紹介

従来の東北論、及び東北のイメージ

縄文時代晩期の遺跡分布

弥生時代の遺跡分布

小山修三『縄文時代』

- 縄文時代以外は中央の文化の植民地
- 奥羽（東北）は低生産力で後進地、辺境
- 凶作・飢饉の多発地帯→悲惨な東北
- 戊辰戦争＝賊軍という蔑視感と一体化
- 女子の身売り、出稼ぎ　一東北の陰

辺境、後進地、貧しくて遅れた東北
というイメージで語られてきた

負の歴史が強調されてきた

近現代の東北
学者・評論家やマスコミによる「国内植民地」論

- 東北は東京（中央）の国内植民地
- 戦前は食糧供給基地、戦後は高度経済成長のための労働力供給基地
- 迷惑施設の原発も過疎地の東北に中央から押しつけられた
- いつも東京に食い物にされ、従属させられてきた

貧困論、後進地論、従属論で東北や宮城を語るのが定番
いいかげんにしてほしい

外から押しつけた、上から目線のワンパターンな解釈

中央との戦い

古代、蝦夷戦争　朝廷×アテルイ・安倍一族等
奥州合戦（1189年）　源頼朝×奥州藤原氏
奥羽仕置き（1590年）　豊臣秀吉×奥羽大名
戊辰戦争（1868）　西南諸藩連合×奥羽越列藩同盟

従来は、東北／敗残の歴史と位置づけ

こんな解釈で元気が出ますか！

むしろ、こんなに戦ってきたのか！という感嘆
奥羽自立の戦い、ではないのか

負けたという結果ではなく、
服従を拒否した精神を読み取りたい

そこに東北の矜持がある

これからも、どうたたかい続けるか

仙台育英高、甲子園で優勝

マスコミは、優勝旗が「白河の関を越えた」と大報道

「白河の関」（下野国と陸奥国の境界）

「白河以北」は東北を指す言葉

・奥羽越列藩同盟の敗北　→賊軍の扱い
「白河以北、一山百文」→反骨として、あえて「河北新報」と名乗る一力健次郎の気概

仙台育英
（奥羽越列藩同盟）

✖

下関国際
（長州藩）

東北人に感動を与えた須江監督の言葉
「宮城のみなさん、東北のみなさん、おめでとうございます！

東北としての歴史的一体感が突如として再生された

東北の近現代史の見方には両面がある

①＜従来の主流の見方＞
　　薩長を中心とした明治政府から賊軍としてと冷遇された歴史
②東北でも近代化が進み、経済が成長し、徐々に社会が豊かに
　　なった歴史

どちらの視点で歴史を見るかによって、見え方が大きく異なる。
両方の複眼的視点が必要

「差別された東北」論、「遅れた東北」論
　　かなりバイアスのかかった上から目線、優越目線の東北論
　　東北人自身も多分に影響されている

新しい東北論の視点

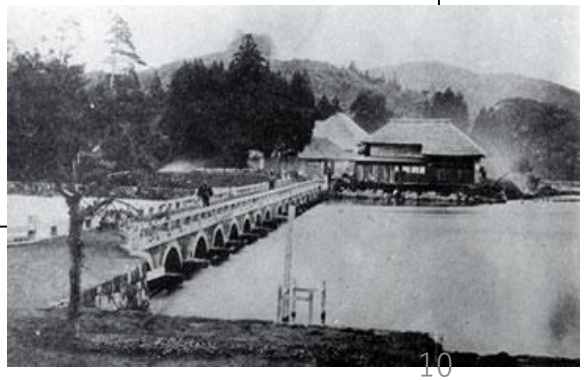
東北人の主体性を尊重した「東北論」や「宮城論」を！

政府による東北振興

- 野蒜築港（台風による破岸のため失敗したが）
- 関山隧道（山形・宮城間交通）
- 北上川改修、阿武隈川改修（岩手・宮城・福島間交通
- 東北本線の敷設、等

広域交通網の開発

青森県の三本木（十和田）開拓
　　盛岡藩開発を新政府が継承
福島県の安積開拓（郡山）
　　猪苗代湖から安積疎水



広大な耕地開発

こうした東北への投資の目的は。東北の位置づけは･･･
従来の研究の解釈

・新首都となった東京を名実ともに政治・経済の中心として育成し、「東北」をその補完地域とすること

・人口が集中する東京への食糧の安定供給の役割

・工場が集積する東京へ
　労働力や原料（鉱産物）などの安定供給の役割を「東北」に担わせた

国や中央は東北を
食糧・労働力・原材料の供給地にしてきた、
という見方
従属史観、国内植民地論

東北の力を見よ！

東北こそが
「世界一うまい米」を生んだ！

東北の稲作の歴史の語られ方

稲作は西日本より約400年遅く東北に伝来

弥生時代以降、「稲作文化の中心は西日本」
という解釈が主流

- 西日本に比べて寒冷な東北は稲作に不利な地域
- 冷夏でしばしば凶作に見舞われ、大飢饉も経験した

「稲作に適さない東北の生産力は低かった」という解釈
ゆえに、稲作後進地だと位置づけ

しかし、本当にそうなのか？

歴史の見方を転換しよう！

凶作や飢饉は東北に大きなダメージ

だがそれを克服する巨大なエネルギーも噴出

凶作・飢饉を克服する社会へと一歩一歩

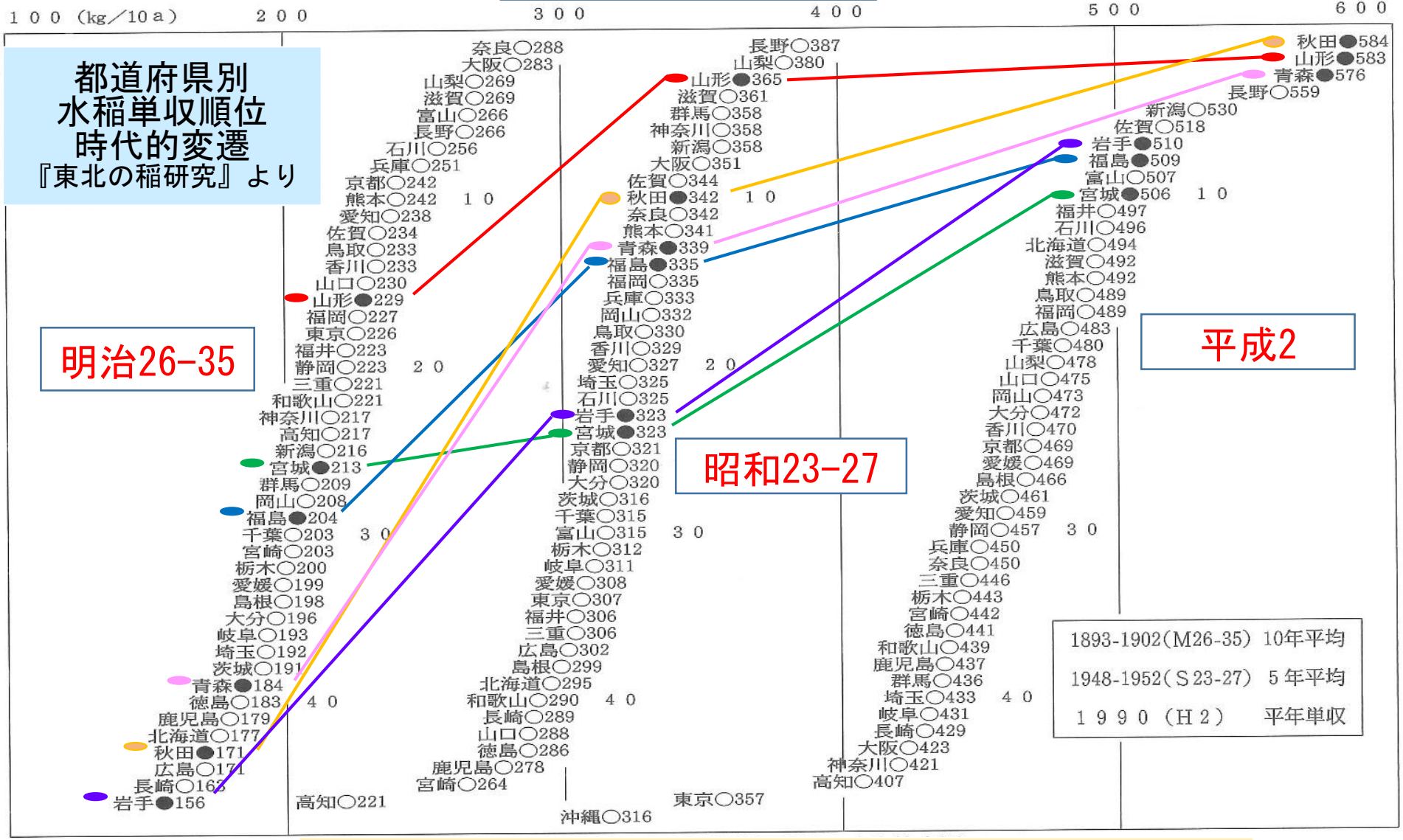
・稲の品種改良や土壌改良、耕作法の改良など
「農書」は全国で一番多い

多大なる知恵と工夫を投じて、稲作適格地へと改良してきた

凶作や飢饉、災害が社会を強くする

被害の実態や悲惨さだけに目を奪われるのではなく、
ダメージを克服するエネルギーの発露を評価しよう
そこに私たちが見出すべき「歴史の教訓」がある

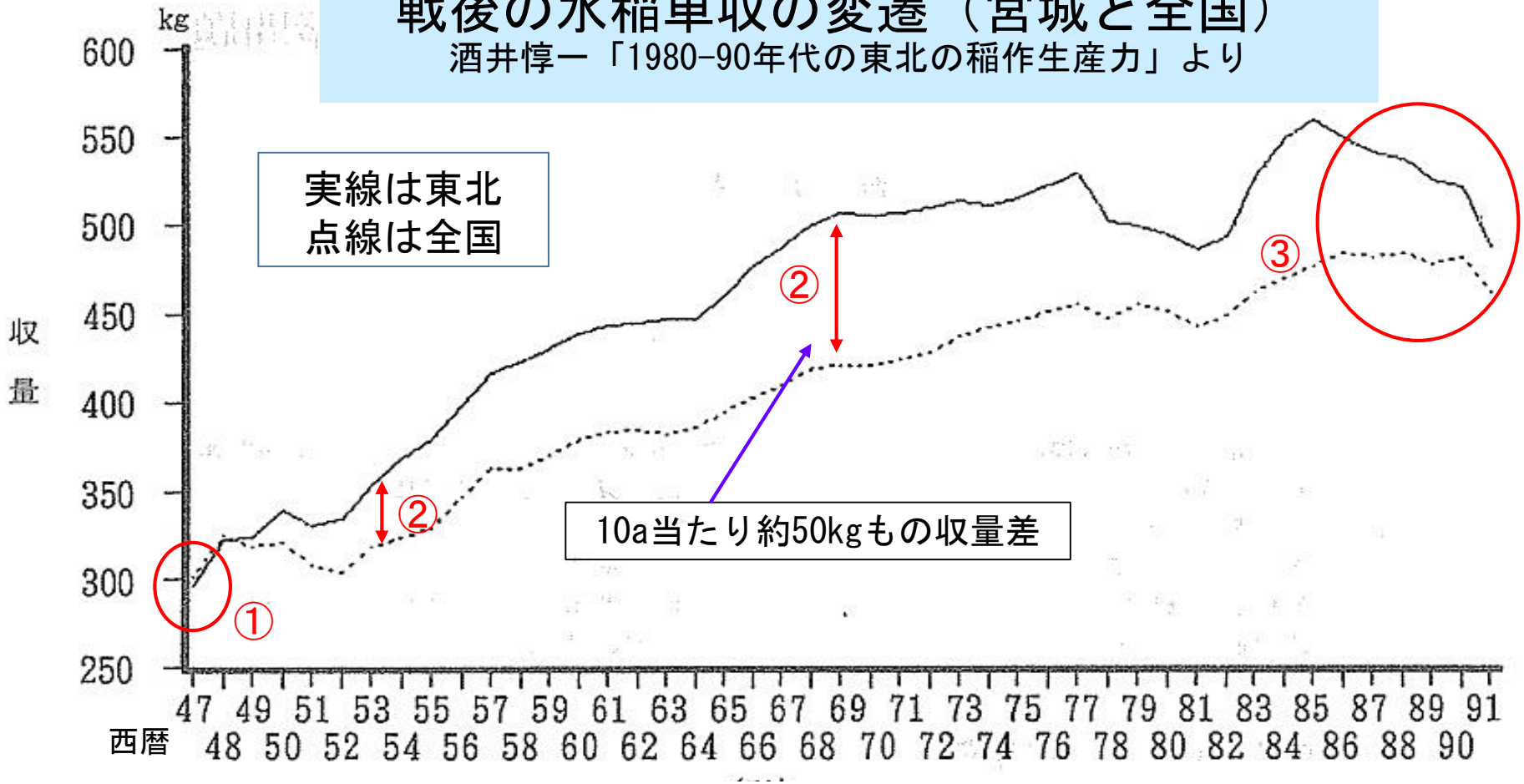
東北の生産力



・明治時代でも山形・宮城は全国中位の生産力
・大正・昭和前期で全国上位へ
・戦後は東北6県が圧倒的上位へ

戦後の水稲単収の変遷（宮城と全国）

酒井惇一「1980-90年代の東北の稲作生産力」より



東北の生産力

①終戦直後の単収は全国並
②1950年代に東北が全国を上回り、以後圧倒
③1980年代半からの下降はうまい米品種栽培による（高品質・低収量）

なぜ、弥生以来の稲作不適格地帯が、
日本有数の米作地帯になりえたのか？

冷害に強い米づくり
農耕法や肥料の工夫、品種改良、等々
ハンディ克服の歴史過程にこそ着目すべき

・その努力が実って、昭和30年代に、「うまい米」の代表
　「ササニシキ」が誕生
・長い困難の末に、「世界で最もうまい米」の産地となった

苦難の末に栄光がある

従属論や後進地論では、
こうした希望の歴史を発見できない

「東北は食糧供給基地」だという見方について

そうした見方は、
東北の人たちの気持ちや主体性を無視した評論

東北の農家は、良質の「食料生産地」であることに
自負心と誇りをもっている

工業化だけを進歩だとする視点からは、
基幹産業である農業の価値を位置づけられず

政府にも国民にも農業軽視の観念があるから
食糧自給率が30%という危機的な状況に

宮城の力を見よ！

近代交通網の整備にみる
地域の力

藩境には番所。物資の通行料徴収 →閉鎖経済

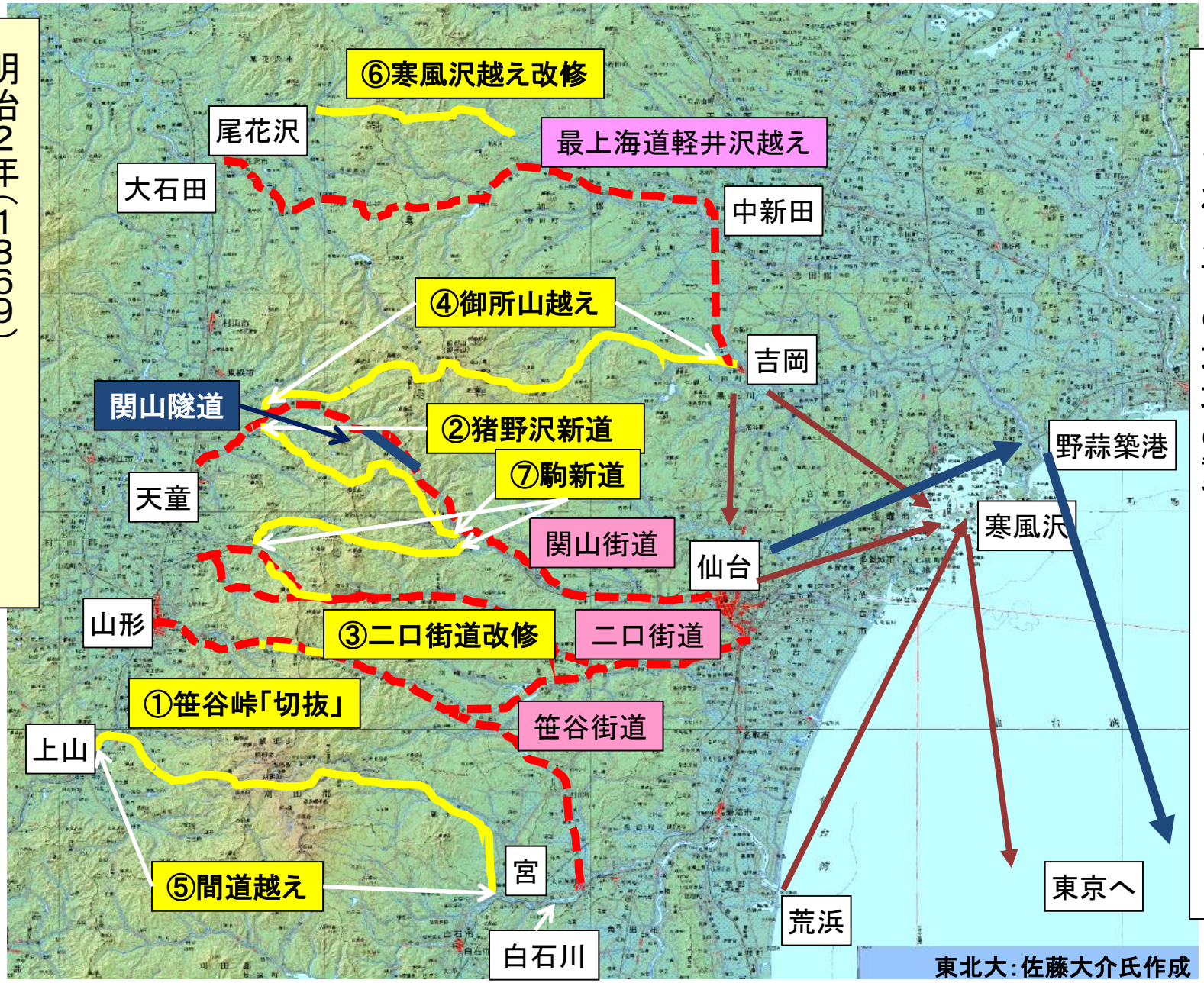
奥羽を結ぶ江戸時代の街道

東北大:佐藤大介氏作成

20

明治3～7年　奥羽横断道路　開削・改修願い　地元有力者→宮城県・山形県

明治2年（1869）
関所の廃止
東京・寒風沢間への蒸気船就航



国策の関山隧道と野蒜築港は明治10年代のこと
それ以前の地域の動き

明治3～7年　奥羽横断道路　開削・改修願い
地元有力者→宮城県・山形県

これまで国策の関山隧道と野蒜築港事業が注目されてきたが、
山形県・宮城県の民間事業が先行して展開

地元民間人による地域・経済活性化策としての交通網の整備
しかも自己資金で

これは断じて
「中央へ従属させるための広域交通網の整備」
ということではない

地元主体の目線からすれば
東北の地域住民の根強い願望と動きが
国策としての事業へと展開
これこそ中央従属論を見直す視点

鉄道網の整備は幹線が重視された

- 明治５年（1872）　新橋・横浜間
- 明治19年（1886）　東海道本線に着手
- 明治22年（1889）　新橋・神戸間開通

- 明治６年（1873）　東北本線　上野・大宮間開通
- 明治24年（1891）　上野・青森間開通

冠動脈の整備でも後回しにされたわけではない

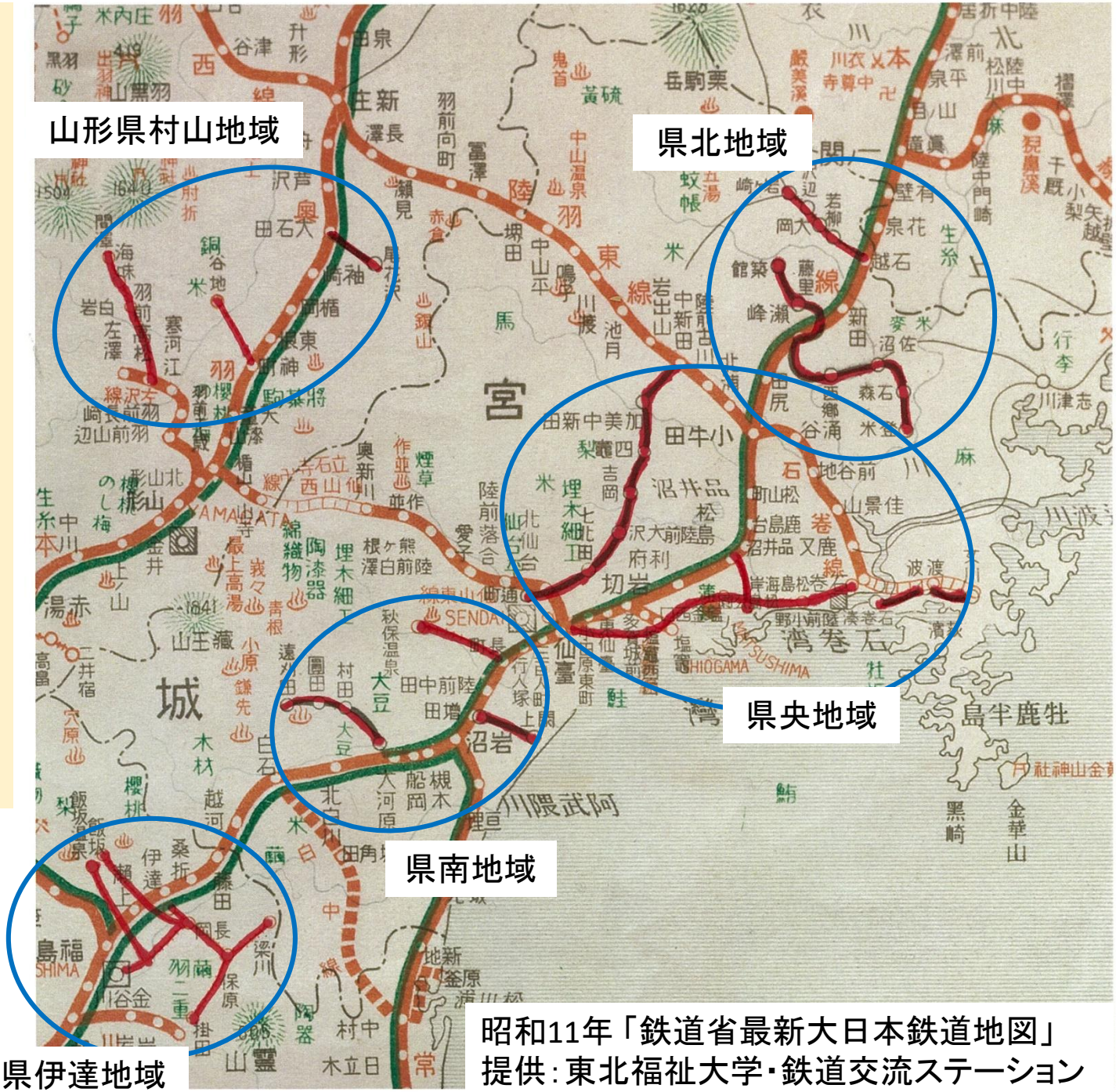
より注目すべきは

地元民による独自の鉄道開発エネルギー

明治・大正期に開設した宮城県の私鉄

	鉄道名	開設年	区間	出資者
1	角田馬車鉄道 角田軌道	明治34年（1901）	槻木・館矢間	丸森：斎藤信太郎ら 株主403人中317人は伊具郡住民
2	仙北軽便鉄道	大正1年（1912）	小牛田・石巻	仙台実業家新居泰治ら 大正8年国鉄石巻線となる
3	秋保電鉄	大正3年（1914）	長町・秋保温泉	仙台・熊谷長吉ら
4	金華山鉄道	大正4年（1915）	石巻湊町・渡波	石巻の柴山栄三ら 昭和14年石巻線開通により廃止
5	仙南軌道	大正6年（1917）	遠刈田・永野	大正10年合併し仙南温泉軌道。昭和12年廃止
6	城南軌道	大正7年（1918）	大河原・永野	
7	仙北鉄道	大正8年（1919）	築館・瀬峰・登米	仙台実業家新居泰治ら。1968年廃止
8	栗原軌道	大正10年（1921）	石越・沢辺・細倉鉱山	県内有力者。平成19年廃止
9	松島電車	大正11年（1922）	松島駅・五大堂前	小林八郎右衛門ら。昭和12年廃止
10	仙台鉄道	大正11年（1922）	通町・吉岡・中新田	伊沢平左衛門・佐々木重兵衛・坂元蔵之丞ら。昭和35年廃止
11	宮城電鉄	大正15年（1926）	仙台・西塩釜・石巻	昭和19年国鉄買収し仙石線
12	増東軌道	大正15年（1926）	閖上・増田	増田町関新次郎ら
13	松山人車軌道	大正11年（1922）	松山町千石・松山駅	松山町松本善右衛門ら。昭和4年廃止

宮城県・昭和戦前期の国鉄と私鉄



昭和11年「鉄道省最新大日本鉄道地図」
提供：東北福祉大学・鉄道交流ステーション

従属論や国内植民地論では説明できない実態

東北本線と接続して仙台圏・首都圏へ連接
私鉄はすべてが地元資本。鉄道による地域活性化策

戦前・戦後の人口変化

都道府県統計書データベースより

宮城県の人口推移（単位千人）

年代		人口	伸び率
明治5	1872	408	
20	1887	712	
44	1911	993	
大正14	1925	1,044	
昭和20	1945	1,462	358%
平成2	1990	2,248	
令和1	2019	2,303	
3	2021	2,290	156%

全国の人口推移

年代	人口	伸び率
明治５年（1872）	3480万人	
昭和20年（1945）	7189万人	206%
令和2年（2020）	1億2622万人	175%

人口増を可能にする経済成長
戦前は宮城県の伸び率の方が高い

「東北は労働力供給基地」だという見方について

- 労働力や食料を首都圏や関西圏に供給したのは東北だけではない。全国がそうだ。
- 東北に対してだけ、中央が労働力や食料などを収奪したとする言説は、

  東北を最初から従属地域と決めつける先入観と、

  ワンパターン思考の結果

- 資本主義の発展は労働力を必要。その人たちのための食料も必要
- 食料や人材を提供した東北は、日本経済の成長を支えてきた。

東北の食料や人材なくして成長なし

東北人から見た歴史の評価に！

150年間の産業構造の変化　宮城県

都道府県統計書データベースより

宮城県　明治11年　職業別人口

大分類		就業者数	%
第1次産業		338,810	85
	農業	329,450	83
	漁業	9,360	2
第2次産業		15,810	3
	工業	15,810	3
第3次産業		50,444	12
	商業	31,842	8
	その他	18,602	4
合計		395,704	100

宮城県　昭和22年　職業別人口

分類		就業者数	%
第１次産業		403,897	62
	農業	369,405	57
	水産業	27,070	4
	林業	7,422	1
第2次産業		87,769	13
	鉱業	6,778	1
	土木建築	23,259	4
	製造工業	57,732	8
第３次産業		156,889	25
	商業	34,221	5
	その他	122,668	20
合計		648,555	100

2020年（令和２）宮城県産業別就業者数（15歳以上）

	大分類	人数	%
第１次産業		47,651	5
	農業，林業	41,489	4
	漁業	6,162	1
第２次産業		263,229	22
	鉱業，採石業，砂利採取業	363	0
	建設業	118,310	10
	製造業	144,556	12
第３次産業		870,238	73
	卸売業，小売業	204,355	17
	医療，福祉	150,899	13
	運輸業，郵便業	73,304	6
	宿泊業，飲食サービス業	64,518	5
	教育，学習支援業	63,049	5
	生活関連サービス業，娯楽業	40,084	3
	情報通信業	29,056	2
	その他		
総　数		1,181,118	100

戦前
- 人口総体の伸びが各分野の就業者増に
- 製造業の伸びが大きい
- 第3次産業の伸び率が高い

戦後
- 第1次産業は1割まで減少
- 第2次産業は3倍
- 第3次産業は5･5倍に急増

もはや宮城は農業県にあらず

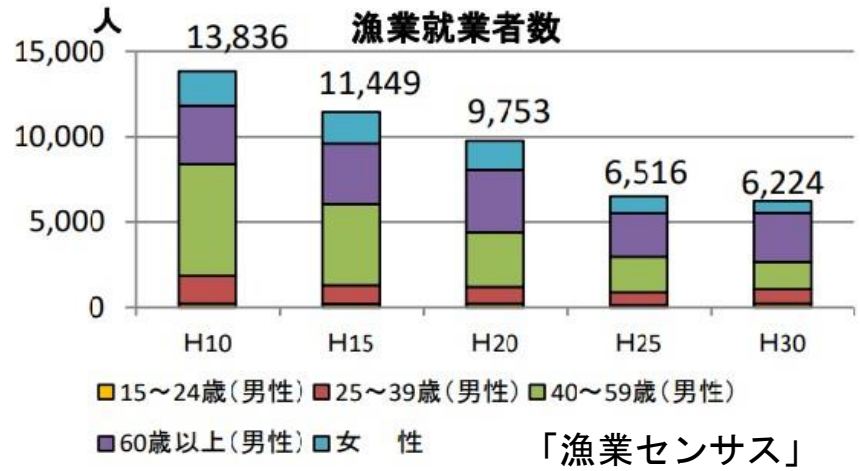
しかし農産物と海産物は
宮城の食文化の基盤

持続的な農林水産業へ

宮城県の農家件数
（「農林業センサス」）

年代	農家件数	減少率
2015年	38，000軒	
2020年	30，000軒	23%減少

宮城県の漁業者数



「漁業センサス」

宮城県
新規就農者数

2010	102
2011	113
2012	172
2013	179
2014	170
2015	173
2016	183
2017	171
2018	158
2019	158
2020	174

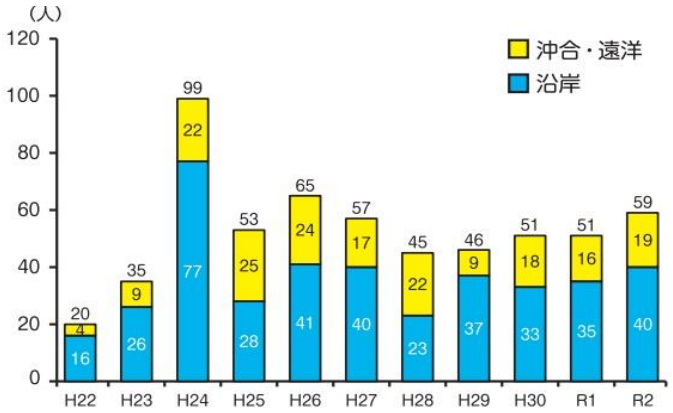
2010年代の新規就農
毎年100人～170人

漁業従事者は20年間で半減
だが新規就業者は増加傾向

農業や漁業に魅力があるから新規就業
魅力の根源を突きとめて、
魅力のアピールと就業支援を

減ることを嘆くのではなく、
プラス思考で積極的施策を

宮城県の新規漁業就業者の推移



データ:水産庁・宮城県調べ

宮城県150年の歴史は
長い歴史の積み重ねの上にある

東北に厳しく、つらい歴史があったことは事実

だが、どこの地域にも困難の歴史あり

偏見をもたずに、地域愛をもった歴史解釈を

今、私たちが豊かさを享受できるのは、

それを築きあげてきた歴史があるから

そこにも目を向けて元気を出していきたい

郷土愛こそ地域を元気にする

希望があり、元気が出る歴史学を！